

徳法寺

「善悪のふたつ

総じてもって存知せざるなり」

杉谷 浄

函館に五稜郭というヨーロッパタイプの城跡があります。江戸時代末期に日米和親条約の締結により開港された箱館（現在の函館）の郊外に江戸幕府によって建造され、大政奉還の後も明治維新政府が政庁として使用していました。徳川幕府海軍指揮官であった榎本武揚率いる旧幕府軍残党は、蝦夷地に上陸すると明治政府軍を撃破し、五稜郭を占領します。しかし、明治政府軍による箱館総攻撃により榎本は降伏し、再び明治政府の手に戻りました。

写真は、その五稜郭と土方歳三です。土方は新選組副長として、京都の治安維持等に当たっていました。鳥羽・伏見の戦いで薩長連合軍に敗北します。その後、各地で転戦しながら、榎本らとともに蝦夷地に渡りました。榎本率いる旧幕府軍

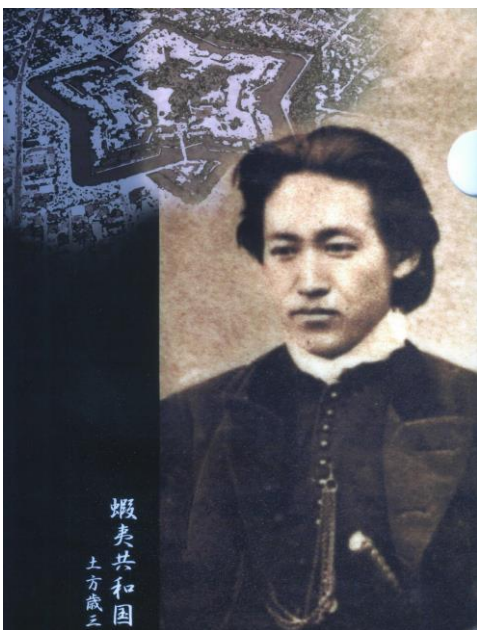
残党は、函館に続き松前から江差まで占領し、独自の政治組織を作り、選挙によって組閣を行います。この結果、土方は陸軍奉行となりました。新政府軍の箱館総攻撃が始まると、土方は先陣で指揮を執りますが、乱戦の最中、腹部に銃弾を受け絶命します。享年三十五歳（満三十四歳）でした。土方の遺体は五稜郭内に埋葬されたとも、別の場所に安置されたとも言われていますが、今でも判明していません。

剣豪としても知られている土方ですが、この写真からは穏やかな好青年の印象を受けます。実際に彼に対する評価は、人によって大きく分かれています。明治維新政府に抵抗して、最後まで徳川幕府の家臣としての立場を守り続けた「忠義の人」という評価が強いかもしれませんが、新しい時代の流れについていけず、いたずらに内戦を長引かせた「旧体制の人」とも言えます。さらには、単に争いが好きなかだけ「好戦的な人」であったという見方も出来るでしょう。ではどれが正しい理解なのかといえ、誰も答えられないものなのでしょう。

人の価値観は、生きてきた環境によって作られます。知識によって得られる理性や合理性によって、多少の方向修正は可能ですが、経験なしに根底から変えることは困難です。自分と同じ人生を歩んだ人は世の中に一人もいないわけですから、同じ価値観を持った人もいないことになります。このことは、他人の価値観を理解することも、自分の価値観を理解させることも困難であることを

意味しています。しかしながら、理解し合うことができなくても、互いの価値観を尊重し合わなければ、私たちは共に生きていくことは出来ないのです。ただし、他人を貶め否定するような価値観は許されません。これは、自由が保障されているとはいえ、殺人や盗みが許されないと同じです。

表題の言葉は、親鸞聖人の言葉として『歎異抄』に書かれているものです。善悪とは価値観によって判断されるものです。私たちは自分の価値観でしか物事を考えることは出来ませんから、善悪を捨てることなどできません。しかし、どのような価値観も相対的なものでしかないというのが仏教なのです。親鸞聖人は、自分の価値観を絶対化することなく、本当のことはわからないのだということに常に言い聞かせることで、自分も他人も互いに傷つけあうことなく生きていけるとおっしゃっているのです。



榎本共和園
土方歳三

お土産に買ったクリアファイル

ウポポイを訪ねて

杉谷 紬

八月にウポポイ（民族共生象徴空間）に行きました。ウポポイはアイヌ文化の継承や普及などを目的とする施設で、博物館や体験施設、慰霊施設を含め、複合的な機能を備えています。白老（しらおい）町のポロト湖畔にかつてあった、ポロトコタンという名のアイヌ文化に関する施設を作り変える形で誕生し、今年の七月に一般公開されました。私は高校の修学旅行でポロトコタンを訪れていたもので、新旧の移り変わりも目にするようになりました。

広大なポロト湖を渡る爽やかな風、草木が茂る柔らかな沿岸の風景は、ポロトコタンであった頃を偲ばせるに十分なものでしたが、施設内の造作は大きく変わっていました。建物を含む真新しい設備や、植えられたばかりの草木は、まだどこかよそよしく目に映ります。若い職員が多かったことも印象的で、設備も人材も（まだ）これから成熟してゆくのだろうと感じさせました。

残念ながら予約制になっていた博物館には入れませんでした。その他の施設や舞台で実演を見て回ることもできました。踊りや演奏の他、丸木舟の操船など多彩な演目があり、アイヌ文化を紹介するだけでなく、職員の伝統技能向上の機会になっています。演目では毎回進行役の職員による簡単な解説が入りますが、そこで繰り返されていたのが、「私は今、

伝統的な服を着ていますが、普段は皆さんと同じような洋服を着ています。」という言葉でした。

これは誤解を防ぐための言葉でしょうが、同時に、「和人」と同じ文化の中で生活しながらも、自らをアイヌ民族として捉えることについての葛藤を感じさせる言葉でもあります。それは、断片的にしか残っていないアイヌ文化をどう受け継いでゆくのか、何をもってアイヌ民族を定義すればよいのか、といった問いにも直結します。

そうした問いへの回答は、究極的には、個々人が自らの内に築いてゆくしかないものです。ただし、それには拠り所となる知識や経験が不可欠です。このことは、知識や経験を共有できれば、ある程度共通した認識を育むことができる、ということでもあります。ウポポイのような施設が、アイヌ文化やアイヌ文化についてどのようなことを発信してゆけるかということは、これからのアイヌ民族やアイヌ文化を形作る上でとても重要です。

ウポポイは、東京オリンピックの開催に合わせて整備が進められた国立の施設です。オリンピック憲章には文化プログラムの実施が盛り込まれており、これまでのオリンピックでも、カナダやオーストラリア等で、開催地の先住民族にまつわる文化事業が行われてきました。ただし、今年は新型コロナウイルスの影響により、オリンピックは開催されませんでした。ウポポイはオリンピックに合わせた公開という、世界的なアピールの絶好の機会を逃し、また感染対策として入場制限やイベントの自粛を迫られることになりました。

こうした逆境の中でも、この度のウポポイの設置及び公開により、国内でアイヌ民族やアイヌ文化についての関心が高まったのではないかと感じています。「ウポポイ」とは、アイヌ語で「（おおぜいで）歌うこと」を意味します。その関心の高まりが沢山の人の中で長く続いてゆき、これからのアイヌ民族やアイヌ文化のあり方を良い方向へと導くことを願っています。



ウポポイの野外施設

ロウソクの化学

太田多一

大聖寺実業高等学校で理科の教員をしている太田と申します。この度縁があり、文章を書くこととなりました。二〇二〇年一月頃より猛威を振るう新型コロナウイルス、今なお感染拡大の第二波で油断を許さぬ状況が続いております。(九月初頭時点での話です。)緊急事態宣言の出された四月と五月は在宅勤務が推奨され、それに伴い時間に余裕ができましたので、かねてより気になっていた一冊の本を手に取りました。その本は二〇一二年にノーベル化学賞を受賞した吉野彰さんが、幼少の頃読んでいたということでした。『ロウソクの科学』です。

『ロウソクの科学』はファラデーの法則(注)で有名なマイケル・ファラデーが、一八六〇年に英国王立研究所で青少年に向けて行った全六回にわたるクリスマス講演会を書籍化したものです。内容は、なぜロウソクが燃えるのかという当たり前のようで実はとても奥の深い話から始まり、当時の最先端科学についての学術的な話から、その時代の生活様式や使っていた道具などが垣間見える話まで、幅広いものとなっています。かなり専門的で難解な話が多いのですが、ここではロウソクの燃焼とヒトの呼吸との関係性についてお話しします。

ロウソクは、蠟を燃料にして光や熱のエネルギー

を放出しますが、密閉された容器に入れると容器内に水滴が生じ、容器の中の酸素を使い切ると炎は次第に消えます。ロウソクの燃焼反応とは、蠟と酸素を燃料として水と二酸化炭素を生成する過程で、光や熱のエネルギーを取り出す(ロウソクの使用用途からも「取り出す」という表現にしました)反応なのです。私達の体の中でも、この現象とよく似た反応が起きています。それが呼吸なのです。

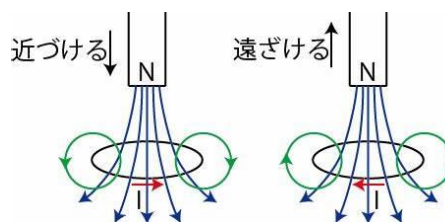
私達ヒトが生きていくためには、心臓や体を動かすのに燃料が必要です。植物の場合、光合成によって自ら燃料を合成することができますが、ヒトの場合、外から摂取するしかありません。これが、食事です。食事により、体内に燃料となる有機物(炭水化物やタンパク質、脂質などのこと)を取り込むのです。この有機物はそのままと活用することができます。呼吸により摂取する酸素を使って有機物を分解することで、初めてエネルギーを獲得できるのです。その結果として、二酸化炭素が放出されます。この一連の過程において、ロウソクの燃焼反応とヒトの呼吸には、エネルギー生成方法での類似性が見て取れるのです。

電気分野に長けていたファラデーですが、この『ロウソクの科学』でも分かるように、ベンゼンの発見など化学分野でも功績を上げています。このように幅広く科学に精通した非常に優秀なファラデーなのですが、実は数学のできない科学者としても有名です。貧しい家庭で生まれたため、十分な教育を受けることができませんでした。しかし、書店で働いた

ことをきっかけに、科学の面白さに触れ、特に電気分野に興味を持ったことで、科学者への道を歩むことになりました。数学を勉強していなかったファラデーは、理論を構築することは不得手でしたが、代わりに多くの実験を繰り返し行うことによって現象を証明していったのです。

この文章を読んで、少しでもファラデーや『ロウソクの科学』については科学という分野に興味を持っていたらこれ幸いです。また機会があれば。

注、ファラデーの法則…電磁誘導において、一つの回路に生じる誘導起電力の大きさはその回路を貫く磁界の変化の割合に比例するとい



徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いていただくだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますのでお気軽にご参加ください。

徳法寺仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師 徳法寺住職 杉谷淨

十月 平安仏教1 最澄 日本天台
十一月 平安仏教2 空海 真言密教
三月 平安仏教3 平安浄土教

十月から平安仏教に入ります。聖徳太子の頃から奈良時代にかけて、中国から様々な流派の仏教が伝来してきましたが、多くの日本人にとっては、異国から伝来した仏神として受けとめられていました。また仏教に理解を示していた人たちにとっても、鎮護国家や疫病退散、怨霊退治としての仏教と、哲学を伴う仏教教理との関係性を理解することは難しかったのです。そこで平安時代に登場するのが、最澄と空海という二人の天才僧です。中国に渡った二人はそれぞれの仏教を持ち帰り、日本人のための日本仏教の基礎を築きます。さらにこの二人とは別に、極楽浄土を求める平安浄土教も起ります。これは法然や親鸞といった鎌倉浄土教の土台となりました。さらに、日本独自の陰陽道や神道も急速にその姿を変えていきます。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。また、一二月から二月までは冬休みとさせていただきます。

徳法寺報恩講案内

十一月十五日(日)

六月に予定しておりました報恩講ですが、コロナ禍により十一月に延期しました。まだまだコロナ禍は収まっておりませんが、日頃の生活を見直す大切なご縁としていただければと願っております。

午後一時より 正信偈のお勤め
草四句目下「弥陀成仏のこのかたは」次第六首

午後一時半より 法話 荒木範夫氏
午後三時より 講演 遠山和大氏

2020年徳法寺報恩講のご案内

開催日 11月15日 日曜日

午後1時より 正信偈のお勤め
草四句目下「弥陀成仏のこのかたは」次第六首

午後1時半より 法話 荒木範夫氏
荒木範夫氏は、お子様の齋をご縁として、呉服店を営みながら大谷派の僧階を取得なさいました。徳法寺へは、毎月二十一日に開いていただく講に頻度となくお話を来ていただきました。多くの法座でわかりやすいご法話をなさっています。

午後3時より 講演 遠山和大氏
遠山和大氏は、富山大学総合情報基盤センター 講師、京都女子大学非常勤講師をなさりながら、世界の火葬がどのように行われているのかを調べていらっしゃいます。当たり前に思っている火葬の行い方ですが、実は様々な様式があるのです。そこには、単に方法が異なるだけでなく、死とは何か、どのように死者と向き合っていくのかという宗教的な考え方の違いがあります。火葬のお話を通して、改めて生きていることの意味を考えさせられます。

例年通り、今年も社会福祉法人「ひびき」が、お茶・ラーメン・着席などの販売をいたします。

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三三二番四号
Tel 076(241)5219
表題揮毫 中田 八千代
ホームページ <http://tokuhou-ji.com>